

東北最古の寺院：腰浜廃寺跡(腰浜町)

福島大学附属中学校と福島東高等学校の東側に腰浜廃寺跡があります。東西23m×南北19mの金堂跡と西側を区画する溝が確認され、金堂跡周辺では多量の瓦が出土しています。腰浜廃寺が建てられた時の軒丸瓦には、八葉の蓮の花の文様があり、百濟救援のための朝鮮半島への遠征(661～663年)の後に建てられた広島県三次市の寺町廃寺跡の瓦と同じ特徴であることから、腰浜廃寺も同じ時期に建てられたと考えられます。東北地方で最古の寺院の一つです。

7世紀に信夫の地を支配していた豪族が建てた寺で、後に信夫郡の郡寺となつたとされていますが、仏教により国家をまもる鎮護国家政策の中で建てられたものと考えられます。9世紀の八つの花の弁の文様のハ弁花文や花の文様が左まわりに回転しているような文様の旋回花文を文様とする軒丸瓦が出土しており、9世紀に建て替えが行われたと考えられます。



腰浜廃寺跡付近図



32.腰浜廃寺が建てられた時の軒丸瓦
(市蔵)



33.寺町廃寺の軒丸瓦
(広島県三次市教育委員会蔵)



34.腰浜廃寺で平安時代に使用された軒丸瓦(市蔵)

コラム 瓦を焼いた窯－宮沢窯跡(岡島)・赤埴窯跡(山口)－

奈良・平安時代に瓦は寺と役所で用いられました。瓦は今の登り窯のようなトンネル式の窯で焼かれました。良質な粘土と燃料となる木が確保できる場所で瓦を作り、窯で焼き上げました。

腰浜廃寺が建てられた時の瓦は、宮畠遺跡(岡島)の南側の丘陵にあった宮沢窯跡で焼かれました。昭和38年に5基の窯跡の発掘調査が行われました。

9世紀の建て替えで用いられた瓦は赤埴窯跡(山口)で焼かれました。昭和39年の発掘調査で3基の窯跡が確認されています。

この他、三本木(渡利)にも腰浜廃寺の瓦を焼いた窯跡の存在が確認されています。



35.宮沢窯跡第4号窯跡

コラム

道奥國・陸奥國、信夫郡

6世紀以降、信夫国造により信達地方の支配が行われていましたが、649(大化5)年の天下立評(全国に評を設置する)により、国造が支配した地域は「評」という行政単位に編成され、土地・人を国家が直接支配する体制になりました。現在の福島市・伊達市・伊達郡の区域は信夫評となり、大宝律令(701年)により信夫郡になります。支配するための役所も置かれました。焼米が出土する五老内町周辺に役所に関係する施設があったと考えられています。



36. 焼米

評・郡には大領、少領、主政、主帳などの役人が配置されましたが、国造の系譜を引く地元の有力者が任じられました。

なお、『常陸國風土記』には、孝徳天皇時代の654年に「足柄峠の東方に常陸国を始め8国を置いた」と書かれており、この8国の中に道奥國が含まれていると解釈されています。信夫評は道奥國に属し、道奥國は後に陸奥國となります。



焼米出土地点近図

■が焼米出土地点

信夫郡の定額寺：西原廃寺跡(飯坂町湯野)県指定史跡

腰浜廃寺が建て替えられた9世紀に飯坂町湯野に西原廃寺が建てられました。昭和46年の発掘調査で金堂と考えられる21.14m × 15.1mの建物跡とその南で13.9m × 11.12mの建物跡が発見されました。いずれも基壇に礎石が配置された瓦葺きの建物です。

西原廃寺は、『類聚国史』に「830(天長7)年 山階寺(興福寺)の僧智興、陸奥國信夫郡に寺一区を造建す。菩提寺と名づく。定額寺の例に預る。」と書かれている菩提寺とされています。

9世紀に飯坂地区で勢力を伸ばした豪族が、権威の象徴として建てた寺で、定額寺の格式を得たものと考えられます。



37. 南方建物基壇(復元) 建物跡の北61mで発見された北方建物跡に残っていた痕跡をもとに、玉石積の基壇として復元されている。



38. 西原廃寺で使用された軒丸瓦 右上の瓦の中央部の旋回花文など腰浜廃寺の平安時代の瓦の影響が見られる。(市蔵)

注 定額寺 奈良・平安時代の寺格のひとつ。高僧・貴族の建てた私寺で官寺に準じ、500束(ないし1000束)の灯分稻(出舉により灯油料に充てる稻)が支給された。

豪族が製作した「木造千手觀音立像」：大蔵寺(小倉寺)

『信達風土雜記』に「大同年間(806~810年)坂上田村麻呂が千手觀音と千体仏を刻ませ、大堂を建て安置」とあり、坂上田村麻呂が小倉寺村に千手觀音を安置する大堂を建てた記述があります。その後、小倉寺村と阿武隈川の対岸に位置する大蔵寺村にあった大蔵寺が小倉寺村の千手觀音堂に移り、現在の大蔵寺になったとされます。

国の重要文化財に指定されている木造千手觀音立像は、高さ4mの木彫で漆を塗り金箔で飾ったもので、高く髪を頭の上に集めて束ねた形や顔や体に力強い張りがあり、10世紀初めころに造られたとされます。

9世紀に法相宗や天台宗・真言宗が地方の有力な豪族に広まり、10世紀にはその豪族による寺院建立や仏像製作が一般化します。大蔵寺の木造千手觀音立像も信夫郡の中で経済力をもった豪族が製作し、觀音堂を建てて安置し、現世利益を願ったものと考えられます。

大蔵寺には、木造千手觀音立像のほか、木造聖觀音菩薩立像1体、菩薩立像や如来坐像、金剛力士立像など26体の仏像があり、県の重要文化財に指定されています。これらの仏像は9~11世紀に信夫郡の豪族により製作され、いくつかの寺院や仏堂に安置されていたものが大蔵寺に集められたものとされ、平安時代の豪族による仏像製作の様子を今に伝えています。



39.木造千手觀音立像 高さ4mの仏像は東北地方でも1,2番目の大きさ。(国指定重要文化財、大蔵寺蔵)



40.大蔵寺觀音堂 信達三十三觀音の第一番札所で、本尊として木造聖觀音菩薩立像(県指定重要文化財)が安置されている。



41.木造金剛力士立像 (県指定重要文化財、大蔵寺蔵)

コラム 平安時代の仏教

830(天長7)年に山階寺(興福寺)の僧智興により西原廃寺が建立されます。興福寺は法相宗ですが、9世紀には惠日寺(磐梯町)などを建立した徳一が会津地方で法相宗の布教を行っています。西原廃寺の例から、福島市でも9世紀に法相宗の布教が行われたことがわかります。最澄が開いた天台宗は835(承和2)年、空海が開いた真言宗は、837(承和4)年以降に諸国への布教が行われます。福島県内においては、9世紀の後半に天台宗の布教が盛んになったとされ、大蔵寺も以前は天台宗であったといわれています。大蔵寺に観音堂が建立された10世紀には、法相宗や天台宗が福島市に根づいたと考えられます。

弥勒菩薩の衆生救済を願った「陶製経筒」：天王寺(飯坂町)

平安時代の中ごろには、釈迦の死去後1500年あるいは2500年で仏の教えが衰えて末法の世になり、1万年後には仏の教えが滅び荒れ果てた世の中になるとする末法思想が広がり、1052(永承7)年に末法の世に入ると信じられていました。末法の世は56億7千万年後に弥勒菩薩により救われるとされ、弥勒菩薩による世の救済のため、経典を容器に入れて伝えることが行われました。

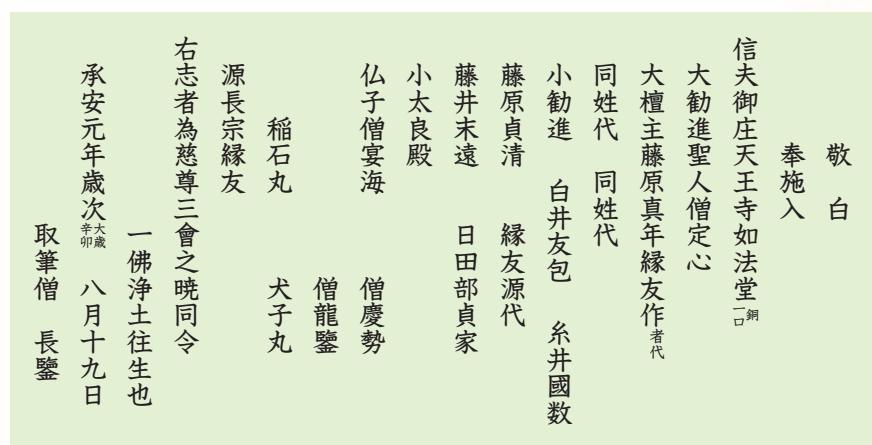
天王寺経筒は、弥勒菩薩による救済のため経典を陶製の経筒に入れて土中に埋めたものです。経筒には下の文章が書かれ、1171(承安元)年8月19日に僧定心が藤原真年の費用により経典を納めたことがわかります。

福島県内では、平沢寺(桑折町)、米山寺(須賀川市)から天王寺経筒と同じ承安元年銘の経筒が発見されており、日付は8月28日と刻まれています。これらの三経筒の製作者名には白井友包、糸井国数、藤原貞清、藤井末遠の4名が共通しており、経筒を専門に製作する集団が存在したと考えられ、弥勒菩薩による救済を願った経筒を埋めた経塚が数多く造られたことがわかります。



42.天王寺陶製経筒

(国指定重要文化財、天王寺蔵)



天王寺陶製経筒に刻まれている文字

近代に至るまで、福島市の大部分は「信夫郡」に属していました。この郡名や信夫山に関する名前の由来はいろいろな説があり、アイヌ語の「広い平原」や「石の山」であるとか、『信達一統志』では篠が生えていたことから「篠生」と称したなどと言われています。

一方で、信夫という読みは「偲ぶ」(人や物を思い慕うこと)、「忍ぶ」(我慢する、隠れること)と通じることから、情緒や意味を持つ土地として和歌に詠されました。また阿武隈川も「おうくま川」と呼ばれ、「逢う」(人と会うこと)と通じることから、都の人たちは強い憧れをもっていました。このような和歌に多く詠みこまれた地名を歌枕といいます。

歌枕に詠まれた「しのぶもちずり」

みちのくから運ばれて来る珍しい物産も都人の興味の対象となりました。石の表面で絹に植物の色素を染め上げた「しのぶもちずり」は信夫地方の名産で、美しい模様は都で流行しました。小倉百人一首に収められた河原左大臣源融の和歌「みちのくのしのぶもちずり たれゆえに 亂れそめにし 我ならなくに(みちのくの「しのぶもちずり」の染めの文様



43.文知摺石

のように、私の心も乱れてしまいました。それは他ならぬあなたのせいです。」の背景には遙かなみちのくに対する思いがあったのです。

また、この歌は源融が信夫の里に住む虎女という女性に贈った歌とも言われ、次のような伝承が残されています。

嵯峨天皇の皇子である源融が陸奥国に出向いた際に、信夫の里の娘である虎女と恋仲になりましたが、融はやがて都に戻らねばならず、二人は離ればなれになります。融を思う虎女が文

知摺石で絹を染め上げていると、思いが通じたのでしょうか、石の表面に融の顔が映し出されたと言います。この文知摺石は融の顔が映ったことから「鏡石」とも呼ばれ、山口の文知摺観音の文知摺石が有名です。また、宮代の山王様として親しまれる日枝神社にも鏡石といわれる石があります。



文知摺観音付近図

注 文知摺石の表記や読み方には諸説あるが、本書では文知摺石(もちずりいし)で統一した。

奈良・平安時代のくらし～台畠遺跡(丸子・南矢野目)～

723(養老7)年の三世一身の法、743(天平15)年の墾田永年私財

法により、未利用の土地を開墾するとその土地の私有が認められることになり、豪族や農民による開墾が盛んに行われるようになります。台畠遺跡は、水田の開墾によりつくられたむらで、平安時代の水田跡と竪穴住居や掘立柱建物がある居住の場が見つかりました。開墾により経済的に豊かになった有力者が掘立柱建物に住み、一般の農民は竪穴住居に住んだようです。

福島市内では、10世紀には一般農民の住まいも掘立柱建物になり、縄文時代から続いた竪穴住居はなくなります。

水田の水路からは、「得万」などと書かれた墨書き土器が数多く発見されています。豊作を願うまつりに使われたものと考えられます。



台畠遺跡付近図



44.台畠遺跡 写真中央より下の黒色土の区域が水田跡で、中央左の黄色土の区域で水田を耕作した人が居住した竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されている。



45.墨書き土器 まつりに使われた「得万」と書かれた土器が水田の水路から出土した。

コラム むらの祭り

『令集解』儀制令春時祭田条には「村ごとに社があること、祭りの日には飲食を準備し、すべての男女が集まり、そこで国家の法が告知されたことや祭りは春・秋2回あった」ことが書かれています。

農事を開始するにあたり豊作を願う春祭りと実りをもたらしてくれた神に感謝する秋祭りの様子が記されています。神に食事を献上し、村人全員で神と飲食を共にする様子は現在の祭りの原形といえます。米から作られる酒は神への献上の象徴的なものとされ祭りにも欠かせないものでした。

王老杉

吾妻地区には、次のような王老杉(おろ杉)の話が伝わっています。

聖武天皇の時代(724~749年)に、^{ささきの}^{おろすぎ} 笹木野字折杉に2000年もたつと思われる大杉がありました。いつか杉の精が若者に化け、近所で一番美しい娘「おろす」に通い続けたそうです。「おろす」が、ある晩若者の着物の裾^{すそ}に糸をつけた小針をさし、夜があけて糸をたどって行くと、大杉にささっていたそうです。

村の相談でこの化け杉を切ることになり、斧^{おの}で切り倒しはじめましたが、翌日になると元通りになってしまい、倒すことができませんでした。そこでよもぎの精に聞くと「木を切ってできる木^こっぱ端^ばを、火で焼いてしまえばもとの通りにもどらない」と教えられ、その通りにすると、ようやく大杉を切ることができたそうです。

笹木野の「折杉」・「小針」の地名は、この伝説から生まれたと言われています。

王老杉の伝説は、『信達古語名所記』、志田正徳の『信達一統志』でも紹介されています。

清明塚と道満塚

王老杉の伝説では、のちにこの杉が祟るのでこれを祓うために陰陽師を頼み、安倍晴明と蘆屋道満が来たので、現在の清明町や昔あった道満塚の地名が残ったと伝えてあります。

『信達一統志』では「道満塚清明塚」の項には、
笹木野村の大杉によって日陰になるので、役所に訴え切り倒しました。ところが杉の精が朝廷に祟りをしたので、



46. 王老杉稻荷神社



王老杉伝承地付近図



47. 清明塚（「福嶋村絵図」部分） 真淨院・誓願寺の上方に「セメシツカ」と書かれている所が清明塚。
(安斎直巳家文書 県歴史資料館寄託)

朝廷は安倍晴明と蘆屋道満の二人を派遣し、天皇の病気が治るよう祈らせました。村人は杉の精を祀るために壇を築き、祟りをなだめ、杉の精を神として祀りました。これが杉妻大明神です。と伝えています。

なお、清明塚は安倍晴明の功績を讃えた塚、道満塚は蘆屋道満が祈祷した祭壇とも言われています。

安倍晴明と稻荷神社

福島稻荷神社には、次のような話が伝わっています。

一条天皇(986~1011)の時、987(永延元)年安倍晴明が天皇の詔により奥羽に下り、福島の地にさしかかり、山水の風致、自然の景勝に目を見張ると共に、地味肥沃で農耕に適し、将来大いに有望であるとして、ここに社を建て、衣食住を司る豊受比売命を迎えてまつり、里の総鎮守としたことに始まり、のち晴明の孫清明が社殿を改築しました。

杉妻荘・余目荘の由来

『信達一統志』では、信夫郡については、余目荘を摺上川と松川の間の村々、杉妻荘を松川と須川(現荒川)の間の村々と阿武隈川沿岸の村々の広大な荘とし、名倉荘を須川の南、杉妻荘に含まれない須川沿岸と阿武隈川左岸の村々とし、川の流域でおおむ概ね区分されています。

この各荘の名称の由来について、王老杉の伝説では、大杉の形から笹木野村を含むこの地方を杉妻荘と呼ばれていたと伝えており、『信達一統志』では、杉の精と女(妻)の話であるので、杉妻荘と呼んでいると伝えています。

また、笹木野村の北にある余目荘は、大杉の日陰の範囲を超える(余る)地であることから、余目荘と呼んでいると伝えています。また『信達古語名所記』では、杉の精が忍んで通ったことから「しのぶ郡」とし、後に信夫と書き改めたとも伝えており、王老杉伝説は、壮大な伝説であることがわかります。



真淨院・福島稻荷神社付近図

- ①清明塚推定位置
- ②道満塚推定位置



48. 福島稻荷神社 (宮町)



49. 『信達一統志』における信夫郡内三荘の範囲

トピック 3

つぐのぶ ただのぶ 佐藤継信・忠信と奥州藤原氏

信夫郡は藤原氏の荘園(信夫庄)となり、佐藤氏はここを治める信
夫庄司となりました。信夫庄司の佐藤基治を含む信夫佐藤氏は、平
泉の奥州藤原氏の一族でした。

おおとりじょう ぼだいじ
佐藤基治は大鳥城(飯坂町)を築いたと言われ、佐藤一族の菩提寺
は同じ飯坂町にある医王寺で、佐藤基治・乙和夫婦や佐藤継信・忠
信兄弟などの佐藤一族の墓と伝えられている石造供養塔があります。

ふじわらのひでひら みなものよしつね
信夫佐藤一族で最も知られているのが、平泉の藤原秀衡に命じられ、源義経に従った佐
藤基治の息子継信・忠信兄弟です。兄弟は義経とともに平氏と戦い、義経の身代わりとなっ
て亡くなりました。兄弟の活躍は、後に書かれた『吾妻鏡』・『平家物語』・『義経記』などに
登場し、のちに『継信忠信絵巻物語』もつくられました。また、「接待」・「八島」・「忠信」
などの謡曲、「狐忠信」・「義経千本桜」などの歌舞伎・浄瑠璃で広く知られるようになりました。

また、悲劇の英雄義経に対する人々の深い同情(判官びいき)^{ほうがん}は、義経へ忠義を尽くした佐藤兄弟や母乙和にも及び、全国各地で伝説として語り継がれています。



大島城・医王寺付近図

コラム 大鳥城

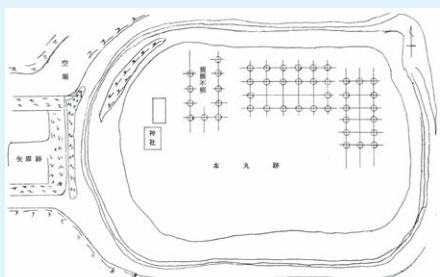
大鳥城は、『信達一統志』では1157(保元2)年佐藤基治が築城したとしています。『信達二郡村誌』では、大鳥城は館ノ山の山頂にあり、一ノ平としていますが、築城者は不明としています。

1972(昭和47)年には館ノ山公園北側で発掘調査が実施され、3棟の掘立柱建物跡が発見され、「矢庫跡」の土壘はさらに土を盛りあげ二度築かれたことが確認されました。時期は遺物から戦国時代と推定されました。その後、館ノ山公園整備に伴い十数回の調査(試掘調査含む)が実施されています。

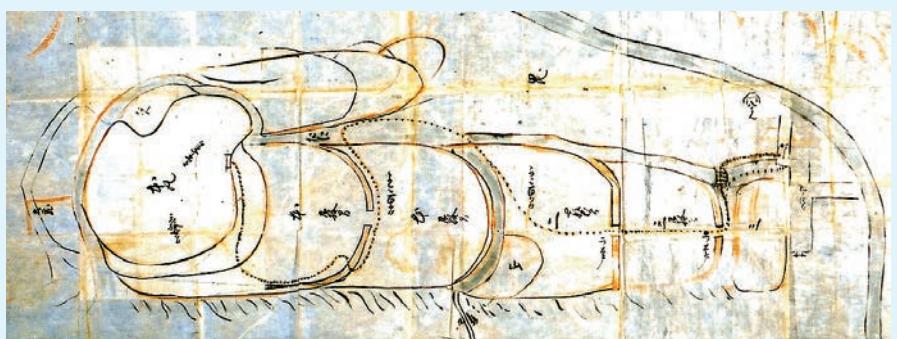
また、2003(平成15)年に従来の大鳥城とは異なる貴重な大鳥城中根家絵図が見つかりました。中根家は福島藩主本多氏の家老職の家柄で、ちゅうせいえいが中世に描かれ保管されていた絵図を写したと考えられています。

大鳥城中根家絵図と2500分の1の地図を復元的に重ね合わせた図が作成されています(鈴木 啓『大鳥城中根家絵図について』複合図)。今回その図に今までの調査成果等を補足して掲載しました。

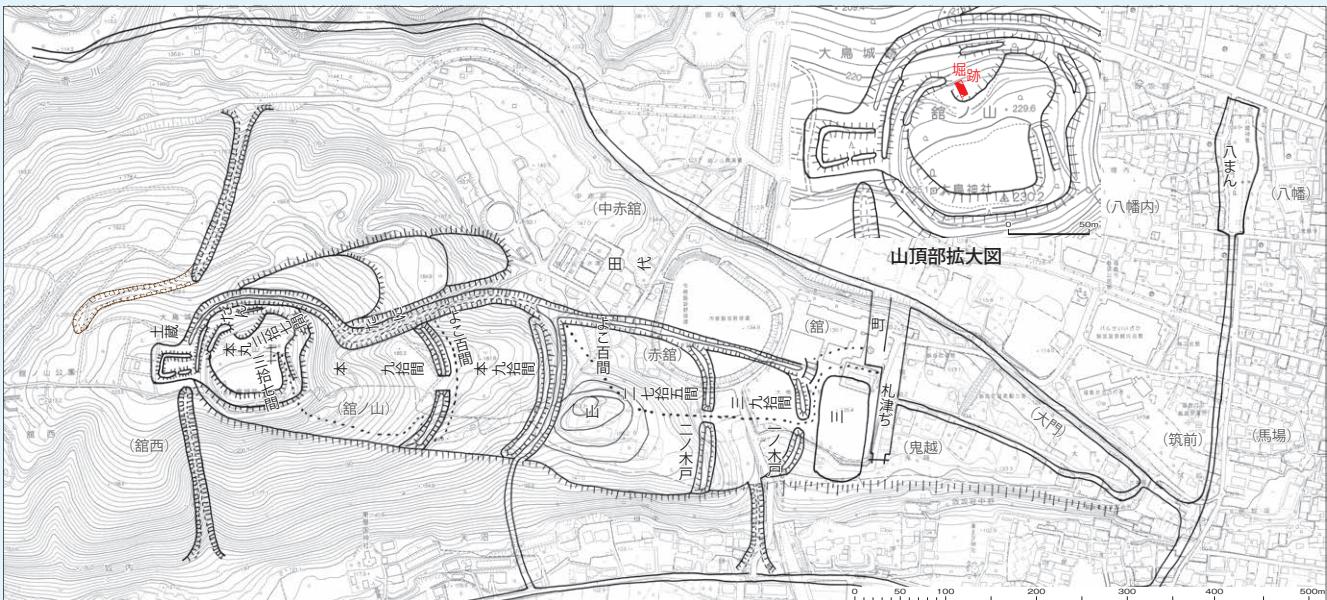
絵図では、山頂部は「本丸」と記載され、その東下段も「本」(本丸)とし東側に虎口(出入口)を有する土塁が見られます。さらに東の下段も「本」で東側は堀と土塁で区切り、その東には「二」(二の丸)とあり、その東の「三」(三の丸)との境は虎口を有する土塁で「二ノ木戸」とあり、



50.1972(昭和47)年山頂部調査で発見された建物跡 (『大島城跡発掘によせて』上)



51. 大鳥城中根家絵図(中根家蔵)



52.大鳥城図 鈴木啓『大鳥城中根家絵図について』の複合図(黒文字:中根家絵図注記)に、発掘調査による発見遺構は赤色で、米軍航空写真による推定遺構は茶色で、現字名を()で補足表示した。

「三」の東端には「一ノ木戸」とあります。その東には「三」と記載のみです。絵図の「ハマン」は八幡神社とされ、八幡内の字名等から神社は広範囲に及んでいたことも想定され、「三」から東側については今後検討が必要ではないかと思います。

「本丸」南東端での調査結果、築城が14世紀前半で生活の場として15世紀後半まで継続し、その後大規模な整地事業を行った16世紀にも存在したことが明らかになりました。調査結果から、佐藤基治時代の居館は、現在の飯坂球場や大島中学校がある字館付近の平坦な地域にあったのではないかと考えられています。

コラム 佐藤継信・忠信の伝説

全国各地には、佐藤兄弟に関する伝説が伝わっています。そのいくつかを紹介します。

- ・宮城県角田市岡には、「伝佐藤継信忠信供養塔」(市指定文化財)と称され、俗称双子石とも呼ばれる板碑があります。
 - ・長野県長野市の善光寺境内にある「石造宝篋印塔」(市指定有形文化財)は、佐藤兄弟の供養塔の伝説が伝えられています。
 - ・京都市にある京都国立博物館の敷地内にある「馬町十三重石塔」は、江戸時代には佐藤兄弟の墓と伝えられました。
 - ・愛知県名古屋市守山区の法輪寺には、佐藤兄弟及び乙和の供養塔として伝承されている宝篋印塔があり、さらに佐藤兄弟と伝えられている木像や位牌があります。



コラム おとわ 乙和の悲しみ

乙和の椿(医王寺境内)

医王寺の境内にある椿は、佐藤継信・忠信を失った母乙和の深い悲しみと慕情が乗り移ったかのように、花を開かずにつぼみのまま落ちてしまうことから、いつしか乙和の椿と呼ばれるようになりました。

はこゆ

継信・忠信が義経に従い戦いに出た後、乙和は二人のわが子を想うたびにここに来て自分の姿を清水に映しては、二人に会った思いをして城に戻ったといわれ、別名「姿見の清水」と伝えられています。

また、継信・忠信の妻若桜と楓が夫の供養のため波来の薬師に行く途中、渴きをおぼえたのでこの清水を汲もうとした時、継信・忠信の生前の姿がありありと水底に見えたので、この名がついたとも伝えられています。



55.乙和の椿(医王寺境内) 56.乙和の清水 (波来湯公園)

注 宝篋印塔 供養塔や墓碑塔として建てられた塔。